

各地よりのたより

臺北支部だより

八月例会 昭和15年八月10日夜（於市公會堂四階屋上園），出席者70名。舊曆七夕の宵に因み、窪川一雄氏の「琴座β種に就て」と題する變光星論の外、藤田芳仲氏の「俳句と天文」、吉村會員の「涼宵星物語」、西川満氏の「臺灣に於ける七夕の傳説」等の趣味講演あり、盛會裡に22時散會。

秋吉海軍大佐天文講演會 昭和15年八月25日夜（市公會堂屋上園），出席者80餘名。海軍水路部第四課長秋吉利雄氏の御來臺を機とし、當支部主催で開會。窪川一雄氏の紹介の辭に次ぎ、大佐は「天文と航海」と題し、前後2時間に亘り天文學的方法を用ひる天文航法に於て、現在迄に天文學が如何様に取り入れられて來たかに就き、仔細に解説され、22時過ぎ閉會したが、當夜は海軍武官酒井少將の臨席もあり、最後まで傾聽され注目を惹いた。(M. Y.)

倉敷天文臺より

拜啓、其の後は御無沙汰致して居ますが、先生始め、皆様お變りございませんか？ 降つて、私儀、其の後すっかり健康を取り戻しましたから、他事ながら御休心下さい。天高き秋となりましたので、今迄の怠慢を取り返へさうと、リキんでおります。

八月は本田、木邊兩氏が見えまして、愉快に談じました。已に木邊様よりおきゝかと存じますが、32樞鏡を、名譽臺長の御厚意で、アルパクト1致す事となり、去る3日東京へ向け發送しました。完了後が楽しみです。時計は（-10秒）程度で、毎日動いて居ます。今後は時々 occultation をやつて見たいと存じます。

以上漫然と近況お知らせまで。草々

九月 6 日

岡 林 滋 樹 拜

た よ り

拜啓、（中略）私の本協會への入會は、天文學と申すより、むしろ、“星座とは面白いものだ”と云ふ事をば、野尻氏著の「星座神話」によつて知り、その序文に書かれてあります通り、神話傳説の花園を逍遙しつゝ、花物語を聞き、昭和13年八月に入會致しました。かくて今日まで仕事の餘暇に、色々和本を読んで参ります内、自分が漸次天文學に對し、はや趣味以上のものを感じ、引きづら

れる様になりました。かく申せば大變鳥潛がましく御座いますが、其所に一つの使命感とでも申します如き、自分のなす可き事はこれだと云ふ、確乎たる感じが致して参りました。所が、其の時に2つの障礙に出遇つたので御座います。

その1つは、自身が一中學校の卒業者でしかないと申す事で御座います。先生の「標準天文學」は読めますが、其の他の書物には不明の所が御座います。如斯く専門的要素を有せざるにも拘らず、飽迄眞の自己を生育す可きである事を想ひ、かくて現在の職業に對し疑惑を生じました。

處で、昨夏の火星接近には協同觀測の一メンバーに加入致し、勇躍觀測續行せし折しも、天界221號(9月號)の卷頭隨筆を拜見しまして、全く不覺に後より頭をガンと殴られた感を抱きました。

何も判らぬ自分が、敢へて玄人を氣取らうとした事に對し、あまりにも火星の對衝は、嚴肅すぎる程嚴然たる尊重す可き事實である事を省察致し、自己の行爲が蚊子鐵牛を食むの感たる時、洵に汗顔の至りで御座いました。こんなわけ故、遂に用紙まで頂戴せし伊達課長には、不都合な話ですが報告未提出のまゝに終りました。

既に、その時より、内に素人としての進路につき一つの悶えが兆し始めました。そして、玄人的素人ではなくて、“偉大なる素人”としての取る可き方法に就一語いて、三思三考して参ります時に、天界12月號の卷頭言を拜讀仕り、一句が痛切に感ぜられ、一行一章に深く思を致されました。あの終りが未解決に残された事に、一層の焦慮を感じるもので御座いますが、末尾に述べられております通り、正式にアマチュアの一人として再出發す可きだと云ふ事に、想到したので御座います。

私は最近職業を、他の或る事情よりして離れました。今では障礙の2つの内の1つは、かくして解決され、心身共に一意専心先生が述べられます如き素人として、新しきスタートすべく意氣込んでゐる者で御座います。

就ては、御多忙中、御面倒乍ら、先生の理想境と申されます説明の御一端、及び其れに到達致します、「アマチュリズム再出發」の方法等、御洩し彼下ば私にとりまして、幸甚の至りと存する次第で御座います。

「二千年の文化史を持つ我が同胞のことであるから、指導さへうまくすれば、優れた天文趣味者や、天文思想家などが必ず輩出するものと思ふ。」と述べられて御座います、その御心に飽迄副ふべく、邁進致度存じますれば、御指導及び御鞭撻賜れば、幸此れに過ぎるものは御座いませぬ。

昭和15年八月11日

門司市にて

矢野彰英

山本一清様 研北

編 輯 室 よ り

倍大號(ダブル・ナンバ)といふものを初めて編輯したわけだが、本誌のやうな複雑な、手間の要る雑誌は、普通の號でも中々骨が折れるのに、倍大號は全く苦心した。しかし、出來て見ると嬉しい。まづ、主筆の卷頭隨筆や、S. I. 及び木邊氏の文は何れも前々號の通り、本誌の呼びもので、今更ら紹介する必要は無い。この號には、ニュヨークのプラネタリウム主事フィッ博士の文と、ワシントン天文臺のレウグス夫人の文とを佐登兒氏に譯して貰つて載せたが、内容を味はうべきは勿論であるほか、こうした風な、一は學術的なもの、他は通俗的なものを、西洋人は如何に取り扱ふかといふことについて、かの人たちの頭腦の働き方を知ることによつて役立つと思ふ。山本氏の“保井春海の星座”は、前の支那の星座總覽の續きのやうなもので、日本精神を研究すべき現代に、我が日本の學者が如何に東洋の天文學上に貢獻したかといふ立場から、一度は知つて置くべきものである。尚ほ、前の支那星座と、今號の日本星座と、又、ついでに、個々の星の名について、特に有名なもの、重要なもの等、全部につき、簡明な索引を載せた。本會の編輯局で苦心して作つたものであるが、之れは、つまり星座や星名の讀み方の索引であると思つて貰へば宜い。皆、普通は漢字で書いてあるとは言へ、和名あり、漢名あり、實際この讀み方がむづかしいのであるから、其の意味で、この索引は何時までも讀者は座右に置かれたい。小槇氏の流星寫眞研究は本邦に於いて誇るべき我が吉井氏の夥しい流星寫眞の統計であつて、之れは、海外にも知らせるべきものであるから、英譯を附し、別刷は諸外國にも送ることにした。此の文のための寫眞も總計3枚あるのだが、餘白が無いので、残り1枚だけは次號にまはす。後藤朝太郎氏の“龍”の字の研究は、さすがに氏の獨壇場で面白い。ホントを言ふと、此の文は今から12年前に編輯局に入つたものであるが、其の時、既に時機を失してゐたので、氣長く今度の辰歳の巡つて來るまで待つてゐたのだ。其のつもりで讀んで頂きたい。サー・クロイズの Mile に関する研究は、天文學と地理學との交渉を念頭に置いて讀んで貰ひたい。こうした研究を、我が日本の“里”についても、誰かがやつて頂くと、大いに有益だと思ふ。伊藤輝美氏とは、未見の士であるが、聞く所によると、天球儀を作る人であるといふ。かうした職業人が見る“星”も誠に面白いに違ひない。最後に、天界新知識が18件載せられた。この部分は、可なり高尚な、尖端的なものが多いのであるが、しかし、讀者が、今日の學界の進歩を知られるためには、最も高く評價されるべきものであることを、信じて疑はない。之れを以つて、本誌第20巻を終る、(1940—9—20)